

# 日蓮聖人最晩年の曼荼羅について

——弘安四・五年を中心として——

上 田 本 昌

一、

弘安四年（一二八一）日蓮聖人は六〇歳を迎え、身延の西谷で病弱の身を静養しつつ、消息文や曼荼羅の図頭に筆を染めてをられた。文永十一年の秋以来二度目の元寇により、世上の不安は高まりを増し、幕府は防備のための軍事費用と戦後の処理に追われていた。他国侵逼の難の適中に際しての心構えや、対応の仕方などについて、弟子や門下に指示がなされている。しかし聖人は依然として西谷から外へは出ることなく、身を山林に親ませつつ、門下への指示だけは、常になされていた。

同七月一日付で曾谷二郎入道に宛た消息文には、「蒙古シタ牒狀シタ已前ニ依テ去リ止ス嘉シ・文永等ノ大地震ノ・大彗星之告ニ再三雖シテ奏シ之レ国主敢無ク信用ス。然而日蓮勸文粗叶フ私意ニ欺ル故此合戦既興盛也ト」とあるので、当然のことながら国難に対して極めて深い関心を持っていたことがわかる。

翌八月廿三日に、「摩尼女」に宛た第一〇九の曼荼羅が図頭ズされている。これは又四天王が略され、その代りに梵字の不動・愛染がほぼ全紙にわたる長さで大書されている。この点については、文永の役の頃に図頭された曼荼羅と

日蓮聖人最晩年の曼荼羅について（上田）

共通するものがあると考えられる。更に熱原法難の前後頃に凶顕された曼荼羅の中にも、こうした梵字の大書が見られる。その理由については、一考してあるので省略するが、佐渡流罪中や文永・弘安の二国難や熱原法難といった時期に、四天王よりも不動・愛染の二梵字を大書されていることは、特に注目に値いするものがあると考えられてくるのである。九月に凶顕された第一一〇の曼荼羅を除いて、同月「俗守常」に授与された第一一から、十二月に「優婆夷一妙」に授与された第一一六に至るまでの七幅には、共に四天王が省略されたままで、二梵字の大書型となっているのである。

弘安の役は二度目の来襲であったので、国民の不安は増大し大國蒙古の侵略に無関心ではおられなかったのである。文永の役がともかくも終わったという楽観的な予測は消え去り、三波四波の来襲も懸念されるとする予測に、過剰な情報も流れて混乱を招く結果となり、第二波の国難は去ったものの、国の崩壊を恐れる声は広範に高まっていったようである。当然のことながら幕府も終戦の処理と、今後の方策に苦慮せざるをえなかった。戦場となった九州博多方面では、多大の犠牲者も出ており、既に文永の役の戦傷が原因で、富木常忍の家主である千葉頼胤が、所領の小城で逝去している例もあり、九州方面だけでなく東国にあっても危機感強いものとなっていたのである。

聖人もこうした異国侵略に関する社会の動きを見聞する中で、仏意に添った安定化を優先させるべく再三諫暁を試みられたが、国王は敢えて採用しようとしなかった。曼荼羅に不動・愛染の二梵字を大書したのも国難や法難を鎮めて万民の安定を第一に考えた為であったろうといえる。

そこでこの摩尼女に授与された一紙の曼荼羅であるが、鎌倉の妙本寺に所蔵されている。摩尼女については如何なる人物か不明であるが、恐らく鎌倉在住の人ではなかったかとも考えられる。凶顕の前日即ち八月二十二日には、

『治部房御返事』が記されている。中老の一人治部房日位は周知の如く駿河で布教に従事していたので、或いは治部房との関連を視野に入れてみることもできそうだが、「御使いそき候へば委くは申まさず候ま。」とあるので、一日違いとはいえず、日位との関係者とみることは、やゝ無理なようにも考えられる。

何れにしても当時、摩尼女が聖人の信者として、西谷と交流のあったことは事実であったといえよう。一紙に書写されている点から見ても、全く摩尼女個人に宛た曼荼羅であったといえる。

一一、

次に九月に入り、「俗日常授与之」の第一一〇の曼荼羅がある。三紙継ぎで山梨県休息の立止寺に所蔵されている。前述の如くこれは四天王を描え、標準的な勧請型式となっている。日常については休息、又はその近郷の信者ではなかったかとも考えられる。日常といえは富木日常が、聖人門下では特に有名であるが、通常は常忍と称してをり、日常と名乗ったのは聖人滅後のこととされているので、この場合の「俗日常」とは別人ということになる。この一幅は前後の曼荼羅中で、四天王を勧請している点に関しても、何らかの理由が存したのではないかと考えられる。これ以降連続して第一一七に至るまで、四天王が略され、二梵字の大書となっているのである。しかし第一一〇の四天王をよく拝見してみると、二梵字と位置をほぼ同じくし、全く接し合うような型となっている。これは弘安年間に入ると、こうした傾向を逐次たどってきているが、特にこの曼荼羅にはそれが顕著となっている。建治の頃の御真筆によると四天王と二梵字は、位置も明確に所をそれぞれに得て、各別に勧請されているのが見られるが、時期と共に両者の接近が始まり、この頃には、四天王と梵字は互いに連結し合うような型に移ってきているのである。

これは「日蓮」というご署名と、花押とが次第に接近し、ついに「蓮」の字が花押の中に全て入り込んでしまっているのと同様の推移を示しているものといえよう。

九月にはもう一幅第一一一の曼荼羅が図顕されている。これは「俗守常授与之」というもので、これ以後第一一七までの六幅は、再び四天王が略され、二梵字の大書となっている。その他迹化の諸菩薩も諸天も一部省略されており、略勧請の型式となっている。「守常」については、詳細が伝わっていない。九月十一日と廿日には、南條兵衛七郎から食料品の御供養が届けられているが、その御返事によると、「彼月氏の靈鷲山は本期此身延の嶺也。参詣遙に中継せり。急々に可<sub>レ</sub>企<sub>レ</sub>来臨」。是にて待入候べし」とあり、「身延靈山」が濃厚となっている。参詣中絶の時に当り、日常・守常らが西谷を尋ねている点からすると、この二人は共に甲斐又は駿河の住人で、殊に守常は南條氏にまつわる人であった可能性もでてくる。主人に代って身延を訪れ、御供養の品々を届け、聖人に伝言を述べる使者の役目を果たす人であれば、信仰も又厚い者が選ばれたのは当然のことであつたろう。御返事にも「御使の申候を承候」と記されている。場合によっては、そうした使者の役を果たした人であつたかもしれないのである。曼荼羅授与の事実から推して、守常もまた篤信の一人であつたことは間違いないものといえよう。

十月に入ると第一一二の曼荼羅が図顕されている。聖人の病状はまた次第に悪化してきており、七月頃から十月にかけて、食欲も振るわず「為老病之上、又不食氣候云云」という状態であつた。檀越からのご供養に対する返信も滞りがちであつたので、曼荼羅の執筆も、思うにまかせぬものがあつたと推察しうる。事実この曼荼羅にも筆勢がやゝ弱まり、「菩薩」の文字も「井」の略字を用いられ、全体に略勧請の型式となっている。

この曼荼羅については、授与者名が削損されて不明であり、千葉市の随喜文庫に所蔵されている。しかし駿河の某

寺にこれを模写したものがあり、それによると左下隅に授与書の一部と日興の添書があると伝えられている。『御本尊集目録』によると、

「俗平太郎授与□」 (以上授与書)

「紀伊国切目刑部左衛門入道息少輔房日然 相伝之」 (以上添書)

と伝えている。また『富士宗学要集史料類聚』を引いて、右添書の他に別筆にて「稻守六郎授与之」ともあると記されている。<sup>26)</sup> 現存の真蹟にはこうした授与書や添書は、すべて削損されていて、正確な授与者は不明のままである。もし模写の授与書が事実とすると、俗平太郎へ授与されたことになるが、果して平太郎が如何なる人物であったか詳かでない。日興の添書についても、事実か否か検証しがたいが、紀伊国の少輔房日然に相伝したことになり、更に稻守六郎に伝えられたことになる。単に少輔房といえは、直に思い出されるのが、聖人門下で最初は秀れた人材として重きを置いていたようであるが、のちに離反し「天魔つきて物にくるう。せう房(少輔房)が如し<sup>27)</sup>」といわれた少輔房のことである。しかしこの人は文永六年七月十六日に亡くなっているので、「紀伊国の少輔房日然」とは全くの別人ということになる。しかりとすると、少輔房日然とは如何なる人物であろうか、というに日興の関係者であったらうとは考えられるものの、それ以上に詳細な点は不明であり、稻守六郎についても同様である。又なんのために授与者名を削除したのか、その意図もさだかでないが、所持者の都合によるものであったらうと推測しうる。

### 三、

十月に入って「俗守綱授与之」の第一二三の曼荼羅がある。京都本法寺の所蔵で一紙の比較的小型で、先の一二二

とはほ同型式である。時を同じくして富城入道宛の御返事が記されているが、その中に蒙古来襲に関連し「此事別此一門大事也。総日本国凶事也。仍忍病一端是を申候はん」とある。富城氏からはたびたび書信が届いていたのだが、老病のため返信が書けないでいた。しかし弘安の役に関しては重大事であり、日本国にとっても興亡の問題であるので、病疾の身ながらも敢て一端を申し述べようというのである。真蹟は中山に所蔵されているが、門下の代筆ではないかとされている。「忍病」書かれるに至ったことだけに、聖人の関心も又大きいものがあつたといえる。この時期に曼荼羅を図頭されるということは、同様に病を推しての執筆ということになり、守綱に対し餘程の必要性があつたものと考えられる。

この点については、次の第一一四の曼荼羅についても同様のことがいえよう。「俗真永授与」で同じく十月の図頭であり、高知の要法寺に所蔵されている。筆勢も紙の大きさも第一一三とはほ同様であり、略勸請となっている。守綱・真永共に詳細は不明であるが、この頃は既に西谷の草庵改築が具体化し、図面や間取りの決定、資材の運搬、資金の調達等が、主な弟子檀越の間で進められていた時期に当る。

前述の富城入道宛の御返事末文には、

天台大師御恩報奉と仕候あひだ、みぐるしげに候房をひきつくろい候ときに、作料に下して候なり。錢四貫をもちて、一間浮提第一の法華堂造たり、と靈山浄土に御参候はん時は申あげさせ給べし。」

とあるので、富城氏の四貫文も大方・小坊・馬舎を造営する資金に当てられたことがわかる。この折り病身を推して敢て筆をとられて図頭に及ばれた相手、守綱・真永なる人物も場合によると西谷の堂宇建立に、少なからず貢献した人々の一族ではなかつたかと推察しうる。これはまた次の第一一五の曼荼羅についても同様である。授与者は「俗近

吉授与之」とあり、紙の大きさや筆法も先の第一一三・第一一四と同様で、京都の本能寺に所蔵されている。共に十月の染筆であつて、近吉も堂宇の建立になんらかのかゝわりを持っていた可能性が考えられてくる。

第一一二の授与者削損を含めて、第一一三・第一一四・第一一五の四幅は共通する型式であり、共に十月の図頭である点等から、時期的に見ても、西谷の草庵大改修に関係のあつた人々とみなしえよう。曼荼羅が授与される信徒は、檀越の中でも特に信仰の篤い人々か、又は特別の事情によるものであつたらうと推察しうるが、なかでも病身を推しての図頭となると、この時期やはり堂宇の造管と直接関連があつた人々との考え方が、濃厚であらう。守常ら四人の名は、この頃に限つて知ることができるのであり、その前後には、ほとんど知られていない。造管となると各職種の者が、多数西谷へ一定期間逗留して建築工事にたずさわつたことであらうし、落慶の前後には出入りも又相当な数にのぼつたことがわかる。

十一月一日に小坊と馬舎ができ上り、八日に大坊の柱建てがおこなわれ二十四日には開堂供養がなされている。こゝうした点からすると工事の関係者に、その安全を祈願し、又は資材寄進者の功を賞して授与されたのではなかつたかとも推察しうる。

「二十三日四日は又そら暗で、さむからず。人のまいる事、洛中かまくらの町の申酉の時のごとし。さだめて子細あるべきか」と記されているので、諸天の守護により、無事に工事が進み、恵まれた日和の落慶式となつたことがわかる。恐らくは西谷にこれだけの人々が出入りしたのは、この時が初めてのことであつたらうと考えられる。

堂宇の完成した翌十二月、第一一六の曼荼羅が優婆夷一妙に授与されている。右下部に「遠江サカラノ小尼給本尊也」という日興の添書がある。一妙という信女がどのような人物か不明であるが、日興筆の「遠江サカラノ小尼」の

関連についても、明確なことは知られていない。ただ日興ゆかりの女性であったことは確かであろう。勸請型式は前の第一一四と同様であるが、「井」が「菩薩」と書き改められており、幾分ながら筆勢も戻ってきているように見受けられる。

老朽化した不便な草庵生活から、新築の成った堂宇に移り、健康状態もやゝ回復してきたのではないかと筆跡上から考えられる。しかし、これと前後して十二月八日に上野殿母尼御前へ出された御返事によると、

「八年が間やせやまいと申、齡と申、としとしに身ゆわく、心をぼれ候つるほどに、今年は春よりこのやまいをこりて、秋すぎ冬にいたるまで、日々にをとろへ、夜々にまさり候つるが、この十餘日はすでに食もほとをどとどまりて候<sup>行</sup>」

とあるので、身延在山中は一進一退の病状を重ねていたことになる。特に「この十餘日はすでに食もほとをどとどまりて」ということで、食欲不振の体力衰退中であったが、上野母尼・大夫志・窪尼といった人々に少康をえて敢て筆をとられたことがわかる。したがって一妙に授与された曼荼羅についても、身体不調の折り、筆をとらなくてはならない餘程の理由があったものとも考えられる。聖人してみると、一人でも多くの信徒にできる限り御本尊を授与し、信仰増進をはかるお心も当然あったろうが、病身の凶顯は相当に負担の大きいものがあったことであろう。

#### 四、

「雪はかさなり、寒はせめ候<sup>行</sup>」という厳寒の中で、弘安五年(一二八二)を迎えた聖人は、正月に第一一七の三枚継ぎ御本尊を凶顯されている。授与者は不明であるが、茂原の鷲山寺に所蔵されている。この曼荼羅から再び四天王

を備えて、本迹両門の諸菩薩も勸請されており、筆勢も元の如くになられている。茂原方面の檀越に授与されたものかとも考えられるが、紙の大きさからすると、個人ではなく、法華集団への授与かともいえよう。正月は四条金吾を始め、内記左近・南條といった人々に四通の書状が出されている。年末年始にかけて、不調の中にも少康を得られていたのではないかと考えられる。

正月はこの他にも、「俗安妙授与之」の第一一八の曼荼羅と、「俗日專授与之」の第一一九の二幅がある。安妙に与えられたのは二枚継ぎで静岡県天城湯ヶ島の妙本寺に所蔵されている。第一一七の曼荼羅と比較すると、迹化の菩薩が省略されている以外は、ほぼ同様の型式となっている。安妙が如何なる人物であったかは不明であるが、恐らくは駿河方面の伊豆地方の女性信徒の一人ではなかったかと考えられよう。新年に当り西谷を訪問したか、又は使者を立ててご供養を届けられたかであろうが、前述の如く年末から正月へかけて、少康状態とはいえ体調を崩してたあとだけに、筆をとられるだけの理由が相当にあったものといえよう。

俗日專に授与された曼荼羅は、沼津の妙海寺にあり三枚継ぎである。これは総勸請の型式で、安妙へ授与されたものより大きく、筆勢も第一一七と同様である。日專は駿河方面の人ではなかったかと推察される。日号で呼ばれていたことからして、熱心な信徒で復数の信徒がグループを組織していたようにも考えられよう。紙の貴重な時代に三枚継ぎの御本尊が与えられた点からも、その背景が推察されてくる。

二月に入って一時又病勢の進み工合が重くなり筆を執ることが難しくなると、日朗が代筆するようなこともあったが、下旬から三月一日にかけて、再び体調が回復してきたようである。この頃に記された『莚三枚御書』によると、

「抑<sup>レ</sup>三月一日より四日にいたるまでの御あそびに、心なぐさみてやせやまいもなをり、虎とるばかりをばへ候<sup>也</sup>」

とある。因みに三月一日より四日に至る間の「御あそび」の解釈によっては、相違する面も生じてくるが、この御書の対告衆が南條七郎次郎時光だとすると、『伯耆公御房消息』や『法華證明鈔』の文面からして、時光は重病から脱出して、間もなく聖人と面会していることになる。或いは聖人が「御あそびに」出かけられたとすると、時光の病状見舞をかねた訪問となるが、何れにしても此の頃の聖人は、病状も相当に回復し、「虎とるばかり」であり、「獅子にのりぬべくをばへ候」という状態であった。

したがって、曼荼羅の図頭にも自ずと力が入り、総勧請の型式をとっておられる。妙海寺は中老の但馬阿闍梨日実の開山で、伝えるところによると、「富士郡沼津村有<sub>レ</sub>高祖持咒之靈地昔時高祖別頭妙事將<sub>ニ</sub>以資始<sub>ト</sub>偶在<sub>ニ</sub>斯地<sub>ニ</sub>云<sub>レ</sub>」とある。八大龍神を勧請して広宣流布を祈願されたとも伝えられているが、此の地方に法華の信徒が住していたことも考えられるし、日専はそうしたグループの代表者の一人ではなかったかと推察しうる。そうしてみると曼荼羅の授与は当然であったとも考えられよう。

## 五、

さて、この図頭が済むと、二月から三月へかけての図頭はなく、四月に入って二幅を数えることができる。即ち「沙門天目文与之」の第二一〇と、「俗藤三郎日全授与之」の第二一一とである。先ず天目へ与えられた曼荼羅は、京都の本隆寺に所蔵されており、三枚継ぎの総勧請である。少康を得られている如く、筆勢もよく雄大であるが、花押はやゝ小型となっている。年月日と増長天王の間、下部に「禅」と他筆が見られ、以下何文字かを消去したように見える。尚『御本尊集目錄』によると、「卯月の下に二を加えたのも、聖筆とは押し難い」としており、授与者について

ても、先に調べた文永十一年六月に凶顕された第一一の曼茶羅が「沙門天目授与之」とある点にもふれて、この第一二〇の授与書は聖筆であるが、第一一の方は他筆によるものであろうとしている。

したがってこの第一二〇の曼茶羅は天目に与えられたものに相違ないものといえよう。天目については既に第一一の曼茶羅のところでも述べているので、ここでは省略するが、天目を中心とする信者の集団ができていたことが考えられる。天目を通してその集団へ授与されたものと見ることもできよう。

第一二一俗藤三郎日全に与えられたものは、堺市妙国寺に所蔵されており、これも三枚継ぎであるが、四天王は省略されてをり、迹化の諸菩薩も名をつらねていない略勧請である。通常の場合、今までの例からすると「俗藤三郎授与之」または「俗日全授与之」とするのが通例であるが、このような授与者名は珍らしい。例えば第九五では「俗藤原国貞 法名日十授与之」とあるので、全く異例のことというわけではないが、こうした表記は他に例を見ることが少ない。つまり俗名と日号が併記されていることから考えて、熱心な信徒の一人であったことが推察しうる。日全がどのような人物であったかは不詳であるが、西谷における晩年の聖人と交信のあった人であることは確実であった。『地引御書』に出てくる「藤兵衛」<sup>(3)</sup>「三郎兵衛尉」との関連も考えられないわけではないが、勿論断定はできない。また「藤」は周知の如く、「藤氏」即ち「藤原氏」のことであるが、この藤三郎がその流れをくむ者であるか否かはともかくとして、日号を持ち、曼茶羅の授与までされている点を考察するとき、当時の信徒中でも、特に聖人の教化を深く受けていた者の一人として考えられよう。

かくして五月も過ぎ六月に入ると、二幅の凶顕があるが、この二幅が聖人最後の曼茶羅となったのである。即ち第一二二の御本尊で茂原の鷲山寺に所蔵されている二枚継ぎであり、授与者は不明である。これは十界勧請で首題・四

天王・梵字・花押共に太字で雄大であるが、保存の関係からか文字が所々薄く、特に「大毘沙門」の箇所は、不鮮明となっている。

また第一二三の曼荼羅は、同じく二枚継ぎで、京都の本圀寺に所蔵されているが、授与者名はこれも不明である。第一二二と比較すると首題は、やゝ細目であるが、四天王も梵字も雄大で、総勸請の型式であり、最後の染筆にふさわしい荘嚴な筆蹟となっている。花押も実に堂々として、末法の導師を象徴するかに拝することができる。まさに「弘安式」と称される御本尊の最後を飾るものといえよう。特に授与者を指定していないことからすると、個人宛ではなく集団か又は法華堂の如き、多数の僧侶が集まる堂宇へ奉安することを目されたものとも考えられよう。前例からして個人宛としたら、当然ことながら授与者名が、下部の左右どちらかに記入されているはずである。特に削除された形跡もないことからすると、やはり個人宛のものとは考えにくい。

此の頃の聖人は、健康状態がまた次第に衰弱を強め、筆をとられることもほとんどされていない。「昭和定本」によると、八月十八日付の上野殿へ宛てた御返事が一通と、同月二十一日付の『身延山御書』が伝わっているのみである。両書とも真蹟は現存していない上に、一説では建治元年とする見方もあり、この二書以外には六月の御本尊図頭以降全く筆をとっておられないことになる。

現存する真蹟の中では、文字通り第一二二と第一二三の両幅が、聖人の絶筆ということになるであろう。したがって六月の此の曼荼羅以降には、聖人が筆をとられることはなかったということになろう。事実聖人はこの両幅を図頭せられたあと、約一か月後の九月八日、病軀静養のため、住み馴れた身延山を離れ、池上へ向けて出発されているのである。九月十九日池上へ到着された聖人は、すでに自ら筆をとることもできぬ程に病状が進み、旅疲れも加わって、

日興が代筆し『波木井殿御報』を遺しておられる。

こうしたことから第一二二と第一二三の曼茶羅は、聖人の最後の筆蹟として、その意義は極めて深く、貴重なものといえよう。

## 六、

以上で日蓮聖人が在世中に凶顕された曼茶羅の総てについて、特に本論では最晩年のものを拝見してきたのであるが、当初にも述べた如く、曼茶羅そのものについての考察もさることながら、主として授与者を中心しながら、聖人と弟子、檀越又は其の集団の人々との関連を知ることには視線を注ぐこととしたのである。即ち聖人晩年の人間関係について、曼茶羅という信仰生活上、最も重要な御本尊を通して、主として身延山に於ける聖人の動静を拝察することにあつたのである。既に周知の如く、曼茶羅はその大部分が身延山で凶顕されたものであるので、曼茶羅にまつわる人間関係は、そのまゝ身延山の聖人をとりまく人間集団として考えていくことができる。

勿論、遺文の上からも、そうした動静を探ることもできるわけであるが、遺文のみでは限られた範囲となってくるので、聖人との交流を広くあらゆる方面から考察する必要がある。その点、曼茶羅の授与者は特に信仰上、深くかゝわっていた人々なので、遺文上にも名を連ねた者が多いと考えられるが、意外にも遺文に名の記されていない人々も数多くあることが、今回の研究によって明らかとなった。

遺文上に名をつらねた人々は、従来も既に研究されているところであるが、曼茶羅の授与者については、一部の著名な弟子や檀越は別として、あまりよく知られていない人々が多い。今後こうした人間関係を研究することにより、

一層身延山における聖人の動静を、明確なものとしていくことができるようになるであろう。

聖人在山九年間の人の出入りについては、既に見てきた如く、入山の初期にあつては、飢渴や辺境の地であることから、極めて少数の限られた人々であったが、次第に常住することによって訪問して来る人々が増加し、特に春から夏をへて秋に至る間の比較的気候の良い時期に多く、冬季の雪害による交通不便の頃は当然のことながら稀になっている。また遺文は主としてご供養者に対する御返事が多く、遠隔の地より使者をもって送り届けた者に集中するようであるが、曼荼羅の授与は、そうした人々の他に直接西谷を尋ね、聖人の譬咳にふれた人々への授与が多いようにも考えられる。今後、こうした人々への視野をひろげることにより、更に鮮明なものとなっていくことを期待したい。

聖人の曼荼羅についての研究を行うに際し、当初にも述べた如く、立正安国会の『御本尊目録』所収の一二三幅と、大曼荼羅本尊集成刊行会の『日蓮聖人門下歴代大曼荼羅本尊集成解説』所収の四幅を合せ、計一二七幅を対象としたものであり、両書に依る所、大なるものがあることを付記し、謝意を表するものである。

〔註〕

- (1) 曾谷二郎「入道殿御報 定遺 一八七五頁
- (2) 『御本尊集目録』(立正安国会) 一五四頁
- (3) 『棲神』第六十六号二七頁参照、災難退治や当病平癒を祈願した際の曼荼羅に多く見られる。
- (4) 『日蓮と蒙古襲来』(川添昭二著) 一九四頁参照、富木常忍が九州での異国防衛の任につくべき可能性をもっていたといっている。

(5) 治部房御返事 定遺 一八八三頁

(6) 宮崎英修教授は『中山法華寺史料』によって、宗祖入滅時は「富木入道常忍」であり、永仁三年十月十一日と同年十二月

廿七日付の曼荼羅に「日常」とあるのが初見であるとしている。(日蓮聖人御遺文辞典八〇九頁)

- (7) 南條兵衛七郎殿御返事 定遺 一一八四頁
- (8) 同 同 一一八三頁
- (9) 富木入道殿御返事 同 一八八六頁
- (10) 『御本尊集目録』 一五七頁
- (11) 同 一五八頁
- (12) 法門可被申様之事 定遺 四四八頁
- (13) 富城入道殿御返事 同 一八八六頁
- (14) 同 同 一八八八頁
- (15) 地引御書 同 一八九四頁
- (16) 同 同 一八九五頁
- (17) 上野殿母尼御前御返事 同 一八九六頁
- (18) 大夫志殿御返事・窪尼御前御返事等が十二月中に執筆されている。(定遺一八九八〜一九〇〇頁)
- (19) 上野殿母尼御前御返事 定遺 一八九七頁
- (20) 蓮三枚御香 同 一九一三頁
- (21) 同 同 一九一三頁
- (22) 『本化別頭仏祖統紀』 十一一七
- (23) 『御本尊集目録』 一六六頁
- (24) 天目については「棲神」第六〇号七六頁の拙論を参照されたい。「日蓮聖人初期の曼荼羅について」の項において既に考察す。
- (25) 地引御書 定遺 一八九五頁